平安京左京八条二坊十四町・十五町

発掘調査現地説明会資料

銭鋳型拓影（原寸）

1997年８月２日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条二坊十四町・十五町発掘調査現地説明会資料

所 在 地　京都市下京区油小路通塩小路下る南不動町
調査期間　1997年6月18日～継続中
調査面積　約2,500m²
調査主体　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

調査地の周辺

京都駅周辺では、再開発に伴って多数の発掘調査を実施しています。これらの調査では平安時代から室町時代後期までの数多くの遺構を検出し、それに伴う大量の遺物が出土しています。なかでも各調査で認められる鋳造関係の遺構・遺物は、京都駅周辺の遺跡の特異性を物語るものとなっています。今回の調査でもこれまでの調査の成果と同様に平安時代後期から室町時代の遺構・遺物、そして鋳造(ちゅうぞう)関係の遺構を確認することができました。

現在の京都駅の構内は、平安京条坊の左京八条三坊に位置し、その南半分のほとんどを占めています。また、駅構内の東半分は平安時代後期には鳥羽天皇

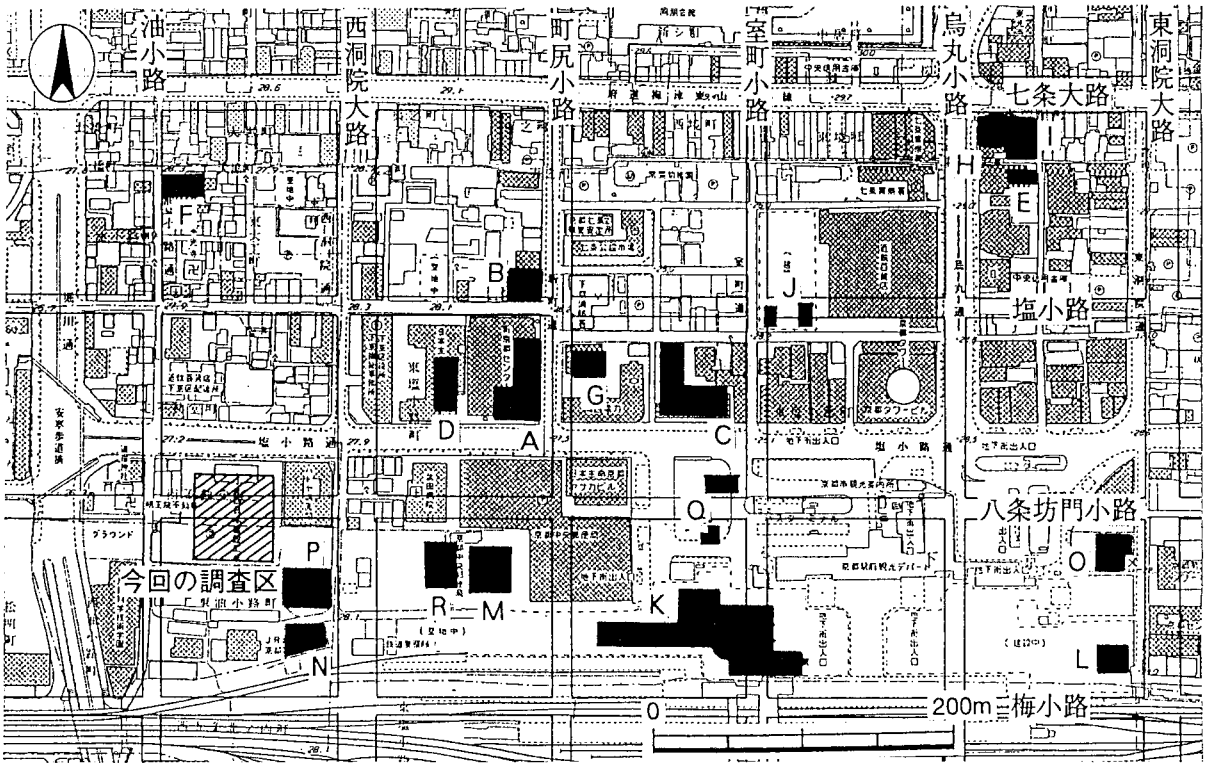


図1　調査位置図　A：1977年（財団法人　古代学協会）　B：1977年　C：1978年　D：1984年（財団法人　古代学協会）　E：1986年　F：1988年　G：1988年（財団法人　古代学協会）　H：1990年　I：1990年　J：1993年（古代文化調査会）　K：1993年～1995年　L：1993年　M：1994年　N：1994年　O：1996年　P：1996年　Q：1996年　R：1997年（A・D・G・J以外は財団法人　京都市埋蔵文化財研究所の調査）

の娘の八条院暲子内親王の「八条院御所」があったといわれています。そして鎌倉時代には「八条院町」と呼ばれる職人の町に変貌し、次いで「八条院町」は東寺に寄進され、室町時代に続いていきます。これらの職人の町は「八条院町」のみならず、さらに西に展開していることはこれまでの発掘調査で徐々に明らかとなってきました。

今回の調査地は京都駅の西側にあります。南北路の西洞院大路をはさむため坊が異なり左京八条二坊になります。また調査地内には東西路の八条坊門小路が通ることから十四と十五町にまたがっていることがわかります。八条二坊内の調査ではこれまでに数箇所で鋳造関係の遺構・遺物を検出していました。今回の調査地でも、調査の進展にしたがって、良好な状況で鋳造関係の遺構が残っていることがわかってきました。

調査地のようす

今回の調査で初めて、八条坊門小路の路面を検出しました。平安時代に編纂された「延喜式」によりますと、小路は幅が４丈（築地と築地の間で約12m）、路面は幅２丈３尺（約6.9m）、側溝は幅３尺（約0.9m）となっています。検出した八条坊門小路は一部を江戸時代の溝で壊されていますが、路面を幅約７mで検出しました。路面は直径１～２cmくらいの大きさの小石を敷き、つき固めています。ごく頑丈に造られ現在の舗装道路と比べてもひけをとらないくらいです。今調査を実施している遺構面は室町時代の初め頃（14世紀前半）ですが、この段階では南北とも側溝はほとんど埋立られ、細い溝になっています。溝に沿って礎石列がみられますが、これは家々が少しでも我が家を広くしようとしたためだと考えられます。これと同じような状況は1974年の京都駅ビルの調査（K地点）で検出した同じ時期の室町小路でもみることができました。

鋳造遺構のようす

鋳造関係の工房跡と考えられる遺構は調査区の西部、八条坊門小路の北側で検出しました。ひとつは南北約２m、東西約0.9mのほぼ長方形で、やや北端部のすぼまった「炉」と推定できる遺構の土壙608があります。天井部の炉壁が落下したと考えられる状態で検出しました。炉壁は内側が火を受けているものの、外側は焼けしまっていないことから、高熱を必要とする炉ではないと考えられます。また、坩堝をのせて銅を溶かす炉としては大きすぎることなどが

あり、容易には答が出せない遺構です。一案として鋳型を焼く（あるいは乾燥させる）炉の可能性をあげておきます。もうひとつは南北とも最大幅４ｍほどで方形に近い形の、炭・焼土などが多量に投棄された遺構です（土壙1045）。土師器皿・坩堝・銅滓などが出土しました。土師器皿には溶けた銅が付着したものが多量にあります。

八条坊門小路の南側でも、鋳造関係の工房跡と考えられる一連の遺構群を検出しました。路寄りに２基の「炉」があります。一基はほとんど壊れて痕跡のみですが（土壙1229）、土壙1320は炉の基底部が残っています。南北約2.3m、東西約1.4mの掘形に0.6m四方ほどの炉が据え付けられます。その西側に洗い場と思われる細長い土壙1234があります。また南側には拳大の礫を敷いた区画があります。奥まったところには一面に炭や焼土が混じった場所があって、ここは「ゆりもの」（図４）という作業が行われた場所と推定できます。「ゆりもの」とは使い終わった坩堝や鋳型を細かく砕いて、それを水洗いして残った銅を集める作業のことをいいます。鋳造には多量の水が必要なため、井戸が家のすぐ裏に掘られています（井戸1297・1318）。これらが一体になって一軒の工房を構成しています。

工房の建物規模については、八条坊門小路をはさんで、多くの柱穴を検出していますが、明らかではありません。おそらくは、簡素な家屋であったと思わ

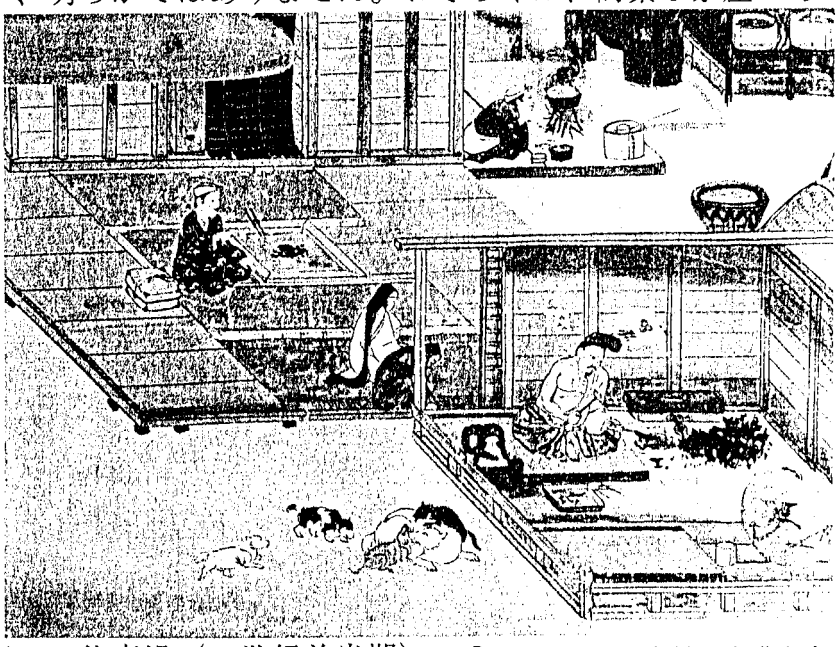


図２　銅細工の仕事場（14世紀前半期）　『ヴィジュアル史料日本職人史　１　職人の誕生』（荏柄天神縁起絵巻　前田育徳会）より転載

れます。また柱穴は、小路路面の端から15mほどの範囲内に密集し、15m付近には井戸が掘られていることから、家の奥行きは15m以内に収まると考えてよいでしょう。

まとめ

今回の調査の大きな成果として、十五町で大型の炉と炭・焼土などを投棄する穴をセットで検出したこと、十四町でも炉と作業場と井戸をセットで検出することができ、鋳造工房の実態を知る手掛かりを得たことです。また鋳造に関係する工房群を西洞院大路より西側で検出したことがあげられます。これにより、京都駅前一帯が鋳造を中心とする大規模な手工業地帯であったことがわかってきました。

銅滓と銅製品の分析

土壙1045から出土した銅滓数点と八条坊門小路路面から出土した銅製品について、京都造形芸術大学教授　内田俊秀氏にX線による分析をお願いしました。これによると、銅滓のうち土師器皿に付着したものに銅の含有率が98%という純度の高いものがある一方、銅製品は鉛の含有率が非常に高く、製品として良好なものではないということです。

図3「間吹き」図　銅の不純物を取り除く作業　『江戸科学古典叢書』鼓銅図録より転載

図4「ゆりもの」図　鋳型や坩堝についた銅の残りかすを集める作業　『江戸科学古典叢書』鼓銅図録より転載

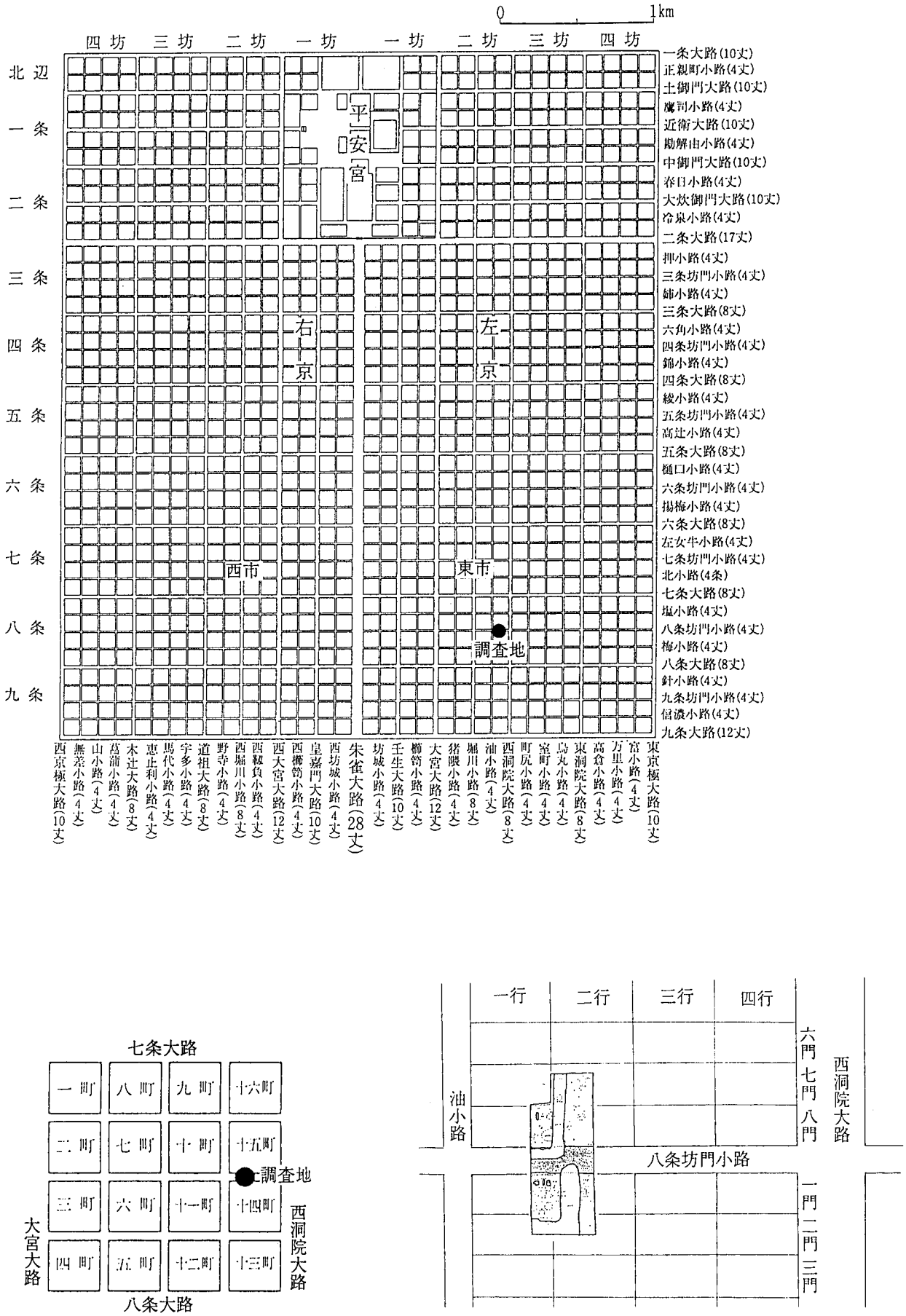

0
1km
四坊
三坊
二坊
一坊
一坊
二坊
三坊
四坊
北辺
一条
二条
三条
四条
五条
六条
七条
八条
九条
平安宮
右京
左京
西市
東市
調査地
一条大路(10丈)
正親町小路(4丈)
土御門大路(10丈)
鷹司小路(4丈)
近衛大路(10丈)
勘解由小路(4丈)
中御門大路(10丈)
春日小路(4丈)
大炊御門大路(10丈)
冷泉小路(4丈)
二条大路(17丈)
押小路(4丈)
三条坊門小路(4丈)
姉小路(4丈)
三条大路(8丈)
六角小路(4丈)
四条坊門小路(4丈)
錦小路(4丈)
四条大路(8丈)
綾小路(4丈)
五条坊門小路(4丈)
高辻小路(4丈)
五条大路(8丈)
樋口小路(4丈)
六条坊門小路(4丈)
揚梅小路(4丈)
六条大路(8丈)
左女牛小路(4丈)
七条坊門小路(4丈)
北小路(4条)
七条大路(8丈)
塩小路(4丈)
八条坊門小路(4丈)
梅小路(4丈)
八条大路(8丈)
針小路(4丈)
九条坊門小路(4丈)
信濃小路(4丈)
九条大路(12丈)
東京極大路(10丈)
富小路(4丈)
万里小路(4丈)
高倉小路(4丈)
東洞院大路(8丈)
烏丸小路(4丈)
室町小路(4丈)
町尻小路(4丈)
西洞院大路(8丈)
油小路(4丈)
堀川小路(8丈)
猪隈小路(4丈)
大宮大路(12丈)
櫛笥小路(4丈)
壬生大路(10丈)
坊城小路(4丈)
朱雀大路(28丈)
西坊城小路(4丈)
皇嘉門大路(10丈)
西櫛笥小路(4丈)
西大宮大路(12丈)
西靱負小路(4丈)
西堀川小路(8丈)
野寺小路(4丈)
道祖大路(8丈)
宇多小路(4丈)
馬代小路(4丈)
恵止利小路(4丈)
木辻大路(8丈)
葛浦小路(4丈)
山小路(4丈)
無差小路(4丈)
西京極大路(10丈)
七条大路
一町
八町
九町
十六町
二町
七町
十町
十五町
調査地
三町
六町
十一町
十四町
四町
五町
十二町
十三町
大宮大路
西洞院大路
八条大路
一行
二行
三行
四行
六門
七門
八門
西洞院大路
油小路
八条坊門小路
一門
二門
三門

図５　平安京と調査地

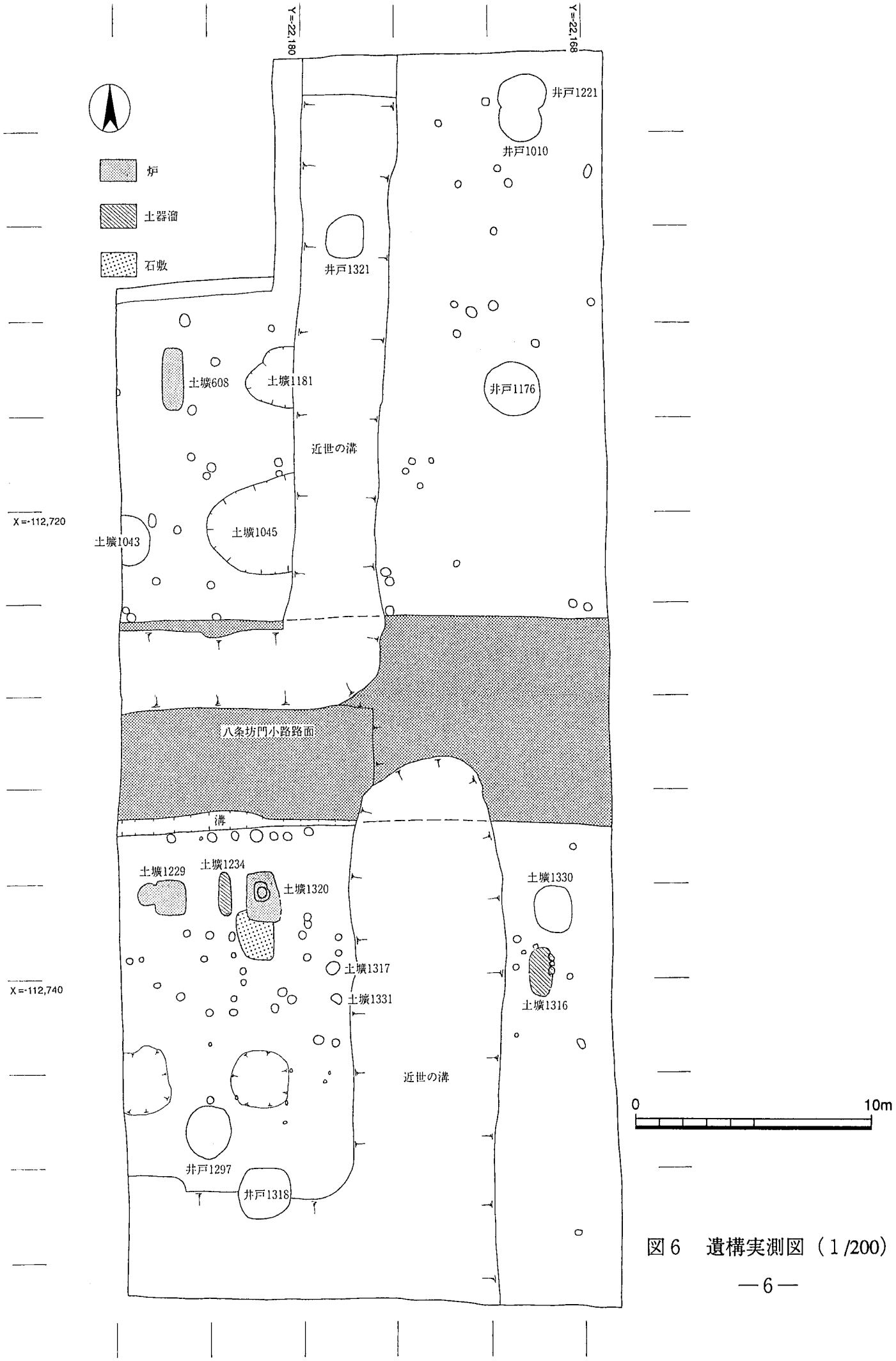
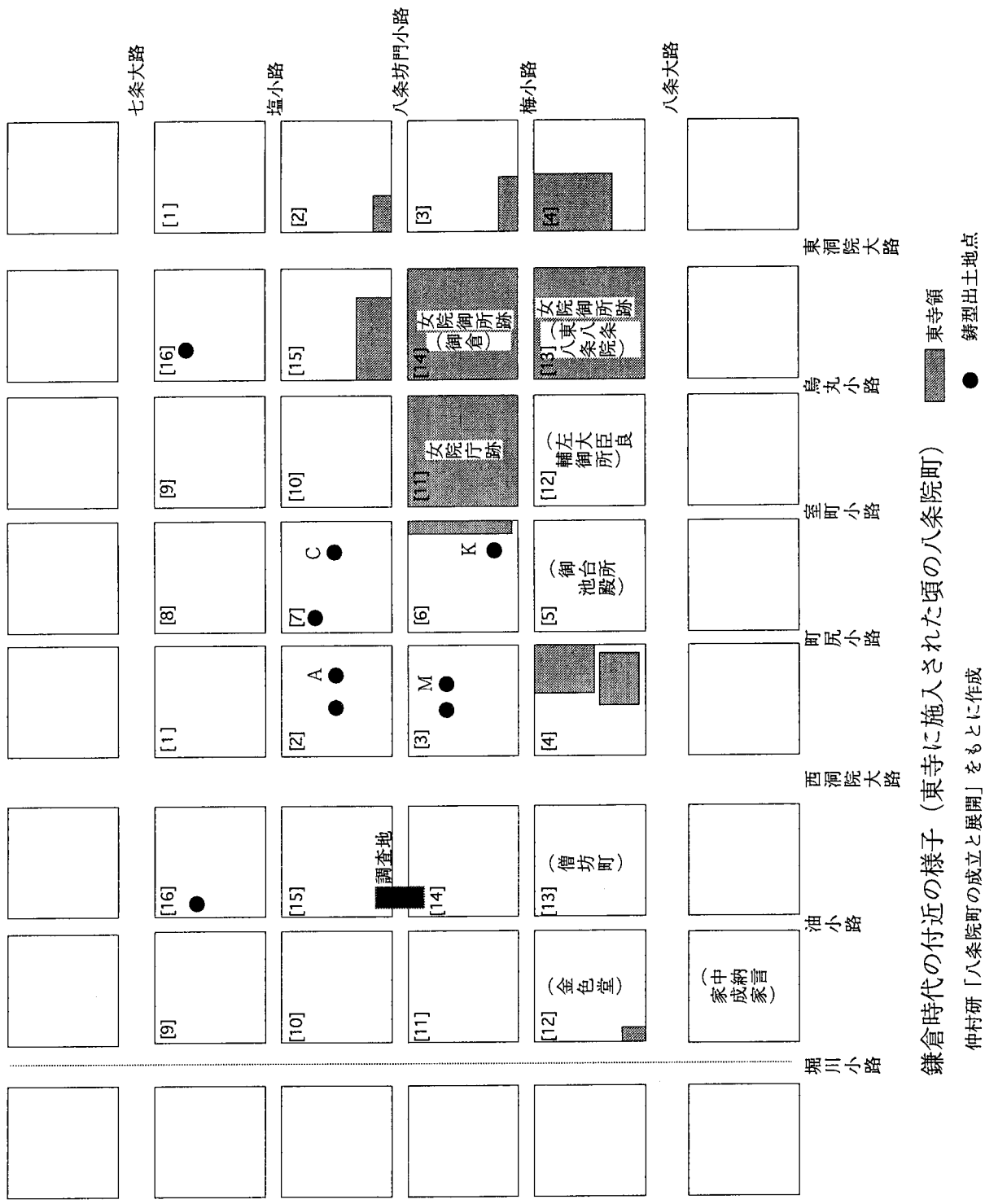


図6　遺構実測図（1/200）



注　八条院町在所注文（教王護国寺文書第一巻二五二号）より作成。
（　）は寛永刊本『拾芥抄』所収の左京右京図の記入を示す。

図７　八条院町と調査地

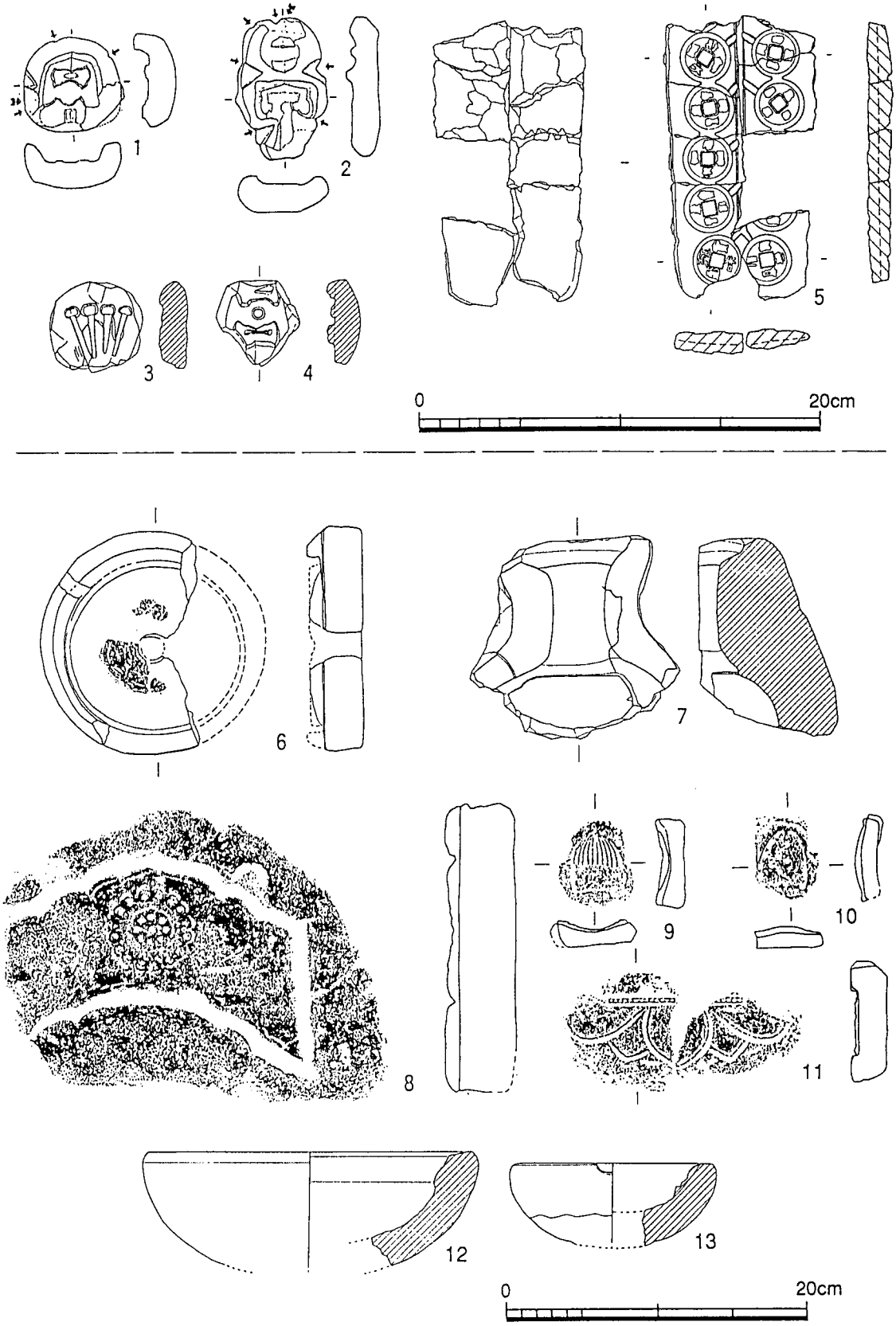


図８　調査地周辺出土の鋳造関係遺物＜参考資料＞

１・２太刀装具鋳型（Ａ地点）　３・４飾金具（Ｃ地点）　５銭鋳型（Ｍ地点）
６鏡鋳型（Ｋ地点）　７仏具鋳型（Ｃ地点）　８～11仏具鋳型（Ｋ地点）
12・13坩堝（Ｃ地点）

写真３　土壙608（北から）

写真４　土壙1045（西から）

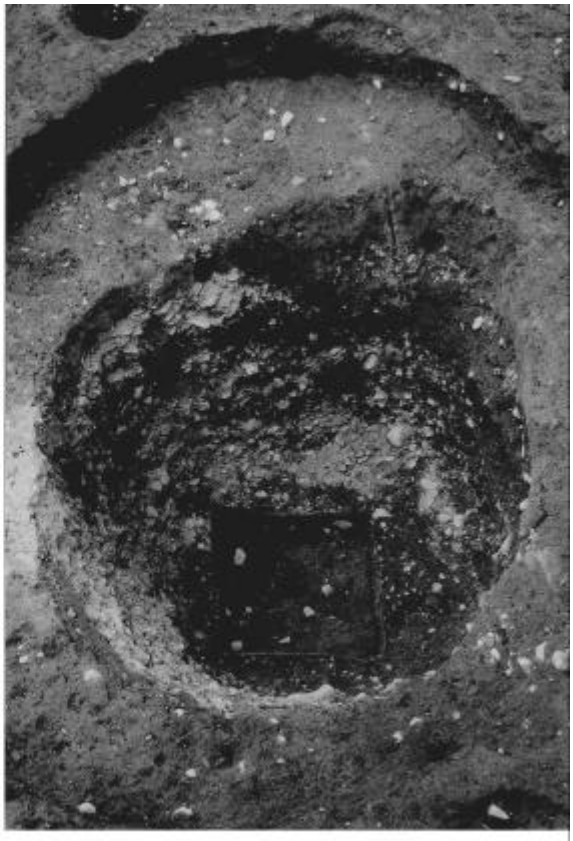


写真５　井戸1176（西から）

写真１　調査区全景（北東から）

写真２　八条坊門小路路面（西から）